

オンライン日本語教育実習の試み

稲葉 みどり

日本語教育講座

Preparing Online for JFL Teaching Practice Online

Midori INABA

Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

要約

本研究では、日本語教育の専門科目の授業で実施した日本語オンライン教材の制作を通じて、学生がどのようなことを学んだかを考察した。授業では、日本語初級後半レベルのオンライン教材をグループで作成して実演し、参観者からのフィードバックを基に改訂して仕上げることを課題とした。学習活動はアクティブ・ラーニングの理念を背景として学生が主体的、能動的、協働的に活動する形態で進めた。本実践では、活動後に学生が書いた省察レポートの内容をKH Coder3 (樋口, 2020) によるテキストマイニングの手法により分析し、以下の結果を得た。「教材制作」においては、オンライン教材の特色、長所、短所等について学生が自分たちで見ることができた。「教材参観」においては、他の作品の独創的なアイデアや工夫等を見ることで、教材作成に必要な様々なスキルを得ることができた。「教材改訂」においては、場面づくりや文脈を示すことの重要性に気づくことができた等である。この授業を通じて学生が学んだことは、日本語教育の初歩的なことばかりであるが、オンライン授業においても対面授業においても通じる大切なことである。オンライン教育実習の体系的な方法等の開発が今後の課題である。

キーワード：日本語教師養成、オンライン教材、日本語教育実習

I. はじめに

1.1 研究の目的と背景

本研究では、日本語教育の専門科目の授業で実施した日本語オンライン教材の制作を通じて、学生がどのようなことを学んだかを考察する。この授業は、日本語教育の実践力の基礎を養成することを目的としたものである。教材の作成を取り上げた理由は、日本語教育には学習指導要領や決まった検定教科書は存在せず、教科書・教材等の選択は全てその教育機関の教師やスタッフ等の判断に委ねられるからである。世界の日本語教育の現場は多様で、その中で最善の教材や教授法等を見出す必要がある。日本語教師に求められるこのような資質、能力、スキルの一部を養成するために、この授業では教材作成を課題として設定した。2020年度前期にコロナ禍で本学の授業が遠隔となったことを受けて、作成する教材もオンラインやオンデマンドで活用できるものとした。授業では、日本語初級後半を対象としたオンライン教材をグループで作成

して実演（発表）し、参観者からのフィードバックを基に改訂して仕上げることを課題とした。学習活動は、遠隔授業ではあるが、アクティブ・ラーニングの理念を背景として学生が主体的、能動的、協働的に活動する形態で進めた。

本研究では、活動後に学生が書いた省察レポートの内容をKH Coder 3 (樋口, 2020) によるテキストマイニングの手法により分析し、1) 教材制作を通じて学んだこと、2) 他のグループの教材と実演を見て学んだこと、3) 教材改訂を通じて学んだこと等を明らかにし、今後の日本語教師養成や実習等に役立てることを目的とする。

1.2 これまでの実践研究

模擬授業を通じた日本語教師養成については、筆者はこれまでにいくつかの実践を行い、その成果や課題等を報告してきた。稲葉 (2020b) では、学部生を対象として実施した日本語の模擬授業の教育的効果を考察した。稲葉 (2020c) では、日本語の模擬授業の省

察レポートの分析から、実習生が学んだことを明らかにした。また、稲葉（2019）では、日本語教授法の模擬授業の観察を通じて実習生が学んだこと、稲葉（2020a）では、日本語模擬で学生が学ばなかったことを明らかにした。しかし、これらは、すべて対面授業での実践を基に考察したものである。そこで、本研究では、オンライン教材の制作と実演という別の形態の模擬授業的な実践から学生がどのようなことを学べるかを明らかにし、日本語教育や日本語教師養成の方法に関する知見を得る。

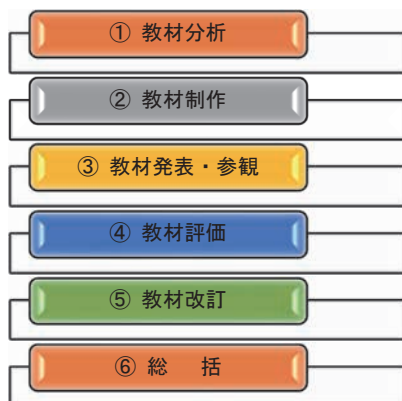
II. 授業の概要

2.1 授業の目標

当該の授業は、日本語教科書の分析、及び、日本語教育の教材開発等を行うことで、日本語教育実践力の基礎を養成することが目標である。特にこの実践では、日本語教育のオンライン教材を制作し、国内だけでなく、海外の学習者にも配信して利用できるようなものを考案することをめざした。

2.2 授業の構成

授業は、【図1】で示したような「教材分析」「教材制作」「教材発表・参観」「教材評価」「教材改訂」「総括」の6段階で構成した。教材分析では、日本語教科書「初級日本語げんきⅡ第2版（坂野他，2011b）」の第13～23課の学習項目や説明、指導法等のポイントを把握する。教材作成では教科書に沿ってオンライン教材を作成する。教材発表では、作成した教材をオンラインで発表（実演・解説）する。発表者以外は参観者となる（教材参観）。教材評価は、発表された教材について質疑・応答、フィードバック等を行う。教材改訂ではフィードバック等を基に教材を改訂して仕上げる。総括として、授業全体を振り返り、省察のレポートを書く。



【図1】 授業の構成

2.3 教材制作の手順

教材制作は以下の手順で行った。教科書の一つの課を選び、グループで作成する。学習者は「初級日本語げんきⅠ改訂版（坂野他，2011a）」を修了したレベルを想定する。尚、学生は、この教科書を使用して前年度に対面で模擬授業を行っている。教材では主に文法・文型・表現、会話等の導入部分に焦点を置く。時間の制約から練習等は適当な数でよい。

教材は、パワーポイントを用いてスライドを作成する。学習者がパワーポイントを操作しながら自分で学習することを想定する。必要に応じて絵図、写真、動画、アニメーション等を入れる。説明は全て録音してつける。長さは5～10分程度。別途、教材の概要（学習目標、特色、工夫した点、苦勞した点他）を書いた資料を作成する。制作にあたって、相談等は遠隔で行い、絶対に対面しないことを約束とした。

2.4 教材発表・参観とフィードバック

作成した教材はグループ毎に発表した。発表はMicrosoft TEAMSによりリアルタイムで行った。発表者は教材とその概要を発表の数日前にアップロードし、参観者は予め教材を見て質問やコメント等を考えて授業に臨んだ。参観者は、発表を見てディスカッションに参加する他、Moodle（本学導入のLMS）のフォーラムからコメント等を投稿した。

2.5 教材改訂と省察レポート

発表後、ディスカッションやフィードバック等を参考にして教材を改訂して提出した。併せて省察の個人レポートを書いた。レポートのテーマは、1) 教材制作を通じて学んだこと（教材制作）、2) 他のグループの作品（教材）を見て学んだこと（教材参観）、3) 教材の改訂点の説明（教材改訂）、4) この授業全体の感想等である。

III. 研究の方法

3.1 分析対象：省察レポート

分析の対象は、この授業の学生が書いた省察レポートである。学生は、学部2年生22名、2名一組で11グループである。レポートは、1) 教材制作、2) 教材参観、3) 教材改訂、4) 授業全体の感想の4つの部分に区切って分析する。

3.2 分析ツール

レポートの分析は、KH Coder 3（樋口，2020）と使用したテキストマイニングにより行った。レポートの文（以下、テキスト）は、文章の単純集計、頻出語彙の抽出、関連語検索、自己組織化マップの生成、KWICコンコーダンスによる使用語の文脈の確認、頻

出語の共起ネットワークの検出、クラスター分析等を行って考察した。前処理では、予備的分析を行い、語彙の抽出・分解がうまくいかない語、専門用語、複合語等を強制抽出語として指定した。テキストは辞書(茶筌/ChaSen)で正しく解析できるように、できる限り漢字仮名交じり文に表記統一した。

IV. レポートの分析

4.1 学習活動の概要

最初にこの授業での3つの学習活動(教材制作・教材参観・教材改訂)がどのようなものであったかをテキストから明らかにする。まず、3つの活動全体のテキストの使用語彙をKH Coder 3を用いて解析した。その結果、段落数55、文数233が確認された。また、総抽出語数(分析対象ファイルに含まれている全ての語の延べ数)は8,136、異なり語数(何種類の語が含まれていたかを示す数)は957であった。この中で分析に使用される語(助詞や助動詞等のような文章にでも現れる一般的な語が除外された数)として3,196語、異なり語数750が抽出された。

次に各活動の概要を知るために、「教材制作」「教材参観」「教材改訂」を外部変数として、「特徴語」の解析を行った。特徴語とは、各部のテキストに特に多く出現している言葉で、単なる頻出語ではなく、データ全体に比して、それぞれの部において特に高い確率で出現している語である。よって、特徴語は、それぞれの活動を特徴づける語である(樋口, 2020)と言える。

【表1】は、解析の結果である。表中の数値は、Jaccardの類似性測度(0から1までの値をとり、関連が強いほど1に近づく)で、この数値が大きい順に10語を選択してリストしている。

「教材制作」の特徴語リストからは、オンライン教

【表1】各活動の特徴語

教材制作		教材参観		教材改訂	
今回	.591	工夫	.409	問題	.600
難しい	.571	他	.400	練習	.400
オンライン	.542	授業	.333	加える	.316
作成	.522	学習	.333	使う	.308
教材	.500	作品	.333	説明	.286
作る	.458	勉強	.316	分かる	.280
授業	.455	内容	.296	付け加える	.263
対面	.450	見る	.286	場面	.250
思う	.444	話す	.263	文	.250
考える	.407	楽しい	.261	例文	.250

*数値は Jaccard 類似性測度

材の作成が難しく、対面授業との違い等、様々なことを考えた様子が窺える。「教材参観」のリストでは、他の教材の内容の様々な工夫等を見ることで勉強になったことが想像できる。「教材改訂」のリストでは練習、問題、説明、例文等を加えて教材を改訂したことを示している。よって、どの部分の省察レポートも趣旨にそった内容で構成されていると判断できる。

次に、どのような学習活動を行ったのかを探るため、動詞に着目する。テキストの頻出語彙の中から動詞を抽出し、3つの学習活動(教材制作・教材参観・教材改訂)を外部変数として、学習活動との関連性の共起ネットワーク(【図2】)を検出した。

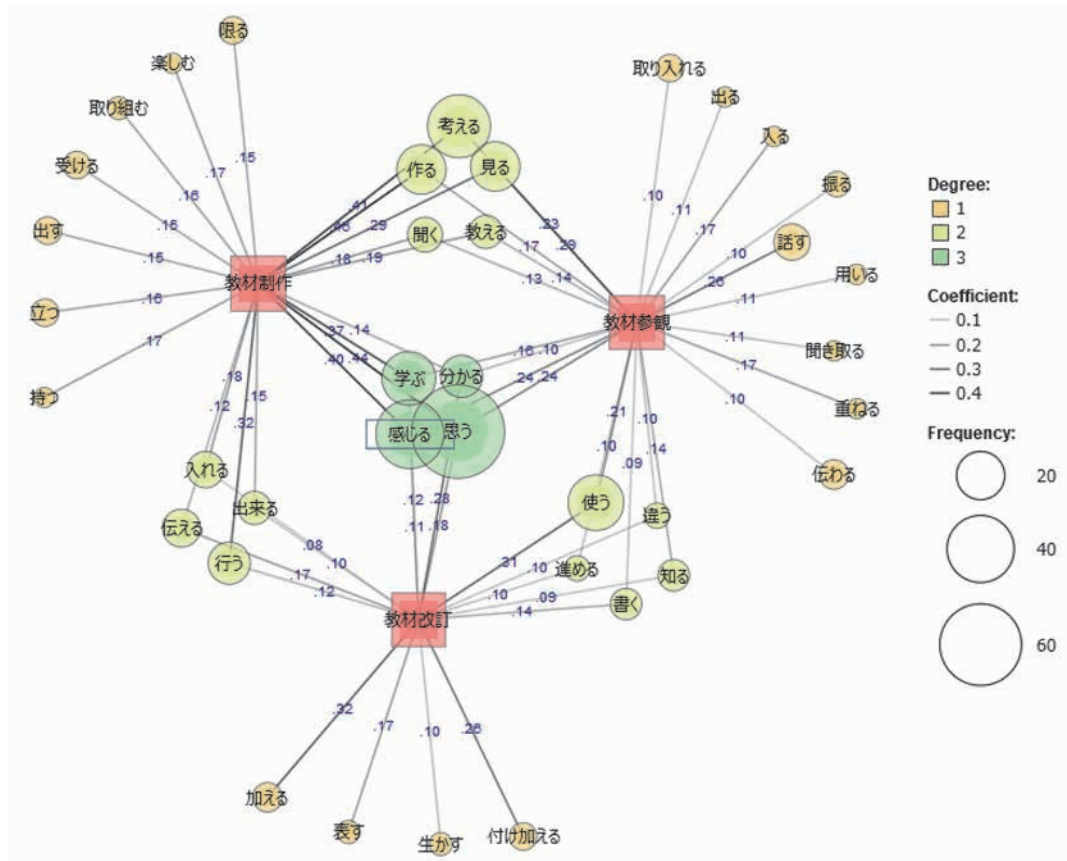
最小出現数3、描画数(描画する共起関係の絞り込み数)は60である。【図2】では、出現数の多い語ほど大きい円で描画され、描画されている語(node)は、「媒介中心性」(それぞれの語がネットワーク構造の中でどの程度中心的な役割をしているかを示す; 樋口, 2020)によって、濃い色ほど中心性が高くなることを示している。語と語を結ぶ線(edge)は、太く濃いほど共起関係が強いことを示している。nodeの数(N)は41、edgeの数(E)は60、密度(D)は0.073である(「N 41, E60, D .073」)。密度(density)とは、実際に描かれている共起関係の数を、存在しうる共起関係(edge)の数で除したものである(樋口, 2020)。

線上の数値は語と語の共起の強さを示すJaccard係数である。この図では、「教材制作」「教材参観」「教材改訂」「授業全体」のそれぞれの語と関連の強い動詞、共通の動詞が線で結ばれている。

まず、3つの活動(教材制作・教材参観・教材改訂)の中心に「思う」「感じる」「学ぶ」「分かる」がきていることから、活動全体において様々な思考等があったことが分かる。尚、本研究では、思考等も活動の一種と捉えている。

「教材制作」と「教材参観」では、「考える」「作る」「見る」等の活動、「教材制作」と「教材改訂」では、「伝える」「入れる」等の活動、「教材参観」と「教材改訂」では、「使う」「知る」「進める」等の活動をしたことが示されている。

この他、「教材制作」「教材参観」「教材改訂」の外側にはそれぞれの活動と共起する様々な動詞が結ばれている。どの動詞も各活動の課題に取り組む過程で行う作業・思考・行動等を表している。これらの動詞群から、この授業の課題遂行の過程で学生はグループで様々な能動的、主体的、協働的な活動に取り組んだことが分かる。オンラインでの学習活動ではあるが、アクティブ・ラーニングの理念に沿ったものであったと考えられる。



【図2】学習活動と抽出動詞の共起ネットワーク

4.2 教材制作からの学びの分析

ここでは、教材制作に関するテキストの分析から、学生がどのようなこと学んだかを明らかにする。当該の部分のテキストの概要は、KH Coder 3で解析した結果、段落数19、文数101、総抽出語数3,555、異なり語数609が抽出された。この中で、分析に使用される語の総語数は1,402語、異なり語数463であった。

ここでは、「思う」「考える」「学ぶ」「分る」の4語をキーワードとして関連語や文脈から教材制作を通じた学びの内容を探る。まず、KH Coder 3で上述の4語の関連語を検索し、それをもとに関連語の共起ネットワーク図を検出して可視化した。それが【図3】で、nodeの数(N)は69、edgeの数(E)は106、密度(D)は0.045である(「N 69, E106, D .045」)。

全体を見ると大小11個の連鎖(サブグラフ)がある。これらの連鎖から学びの内容を読み解いていく。KWICコンコーダンスでテキストを確認しながら、一つひとつ見ていくことにする。

まず、キーワード「学ぶ」「考える」「思う」を含む7語の連鎖では、教材作成の過程で、対面授業とは異なる様々な点を思い浮かべながら、どうしたら学習者に見やすくなるか等について考えたことを示している。

「重要・経験・受ける」等を含む19語の大きな連鎖は、「対面とオンラインで教えることの違い」「教える際に大切なこと」「教える内容をどう伝えるか」「自主学习

につなげるにはどうするか」「スライド上でコミュニケーションを増やすにはどうするか等が見られた。

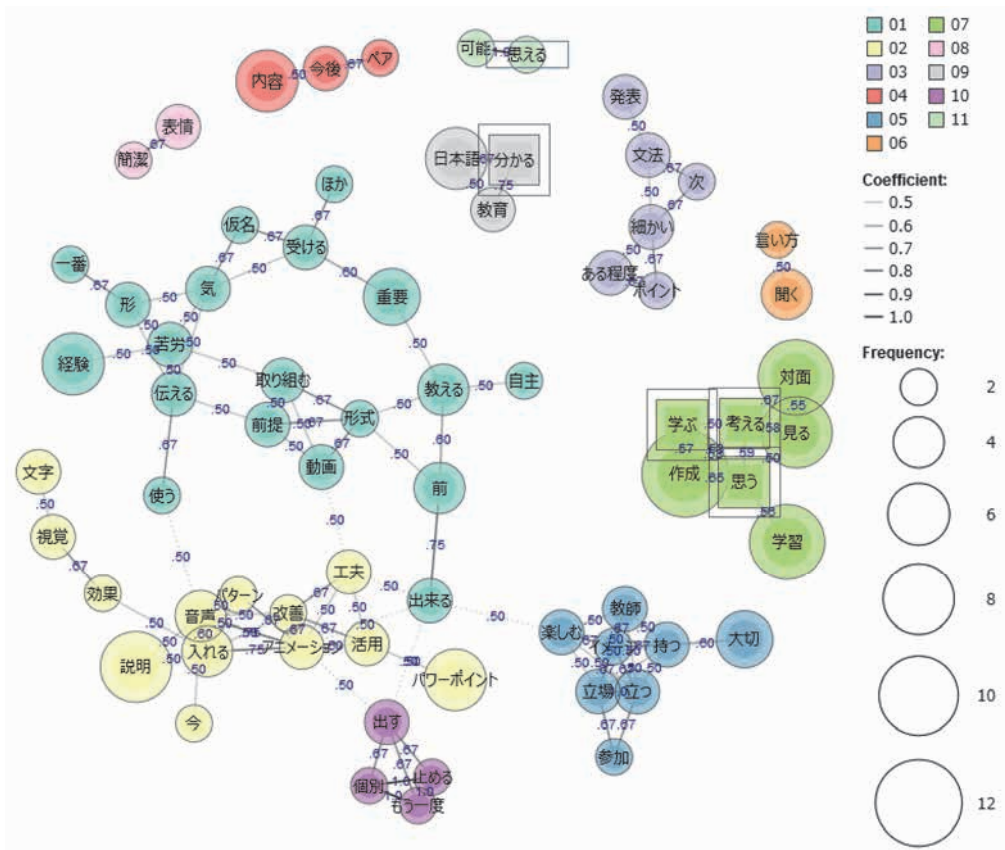
「説明・入れる・パワーポイント」等を含む13語の連鎖では、パワーポイントを使った教材作成の技術的な面について書かれていた。説明、音声、アニメーションの入れ方や効果的な使い方、動画の挿入等、今回の実践で様々な使い方を学んだことが分かった。

「大切・持つ・教師」等を中心とした8語の連鎖では、「指導内容について教師側がしっかりとイメージを持っておくことが大切」「学習者の立場に立って授業計画や授業内容を決める」「楽しんでもらえるような授業を作る」等の教師や学習者の立場から教材作成を考えたことが分かった。

次に、4語以下の小さい連鎖を見る。「分る・教育・日本語」では、「教材を分かりやすく提示する方法」「対面のコミュニケーションなしで楽しい授業をつくる方法」等について考えたことを表している。

「出す・止める・もう一度」の連鎖では、オンライン教材の長所に触れていた。具体的には、「パワーポイントを使用した教材では学習者の理解度に合わせて止めたり、もう一度提示したり、個別の指導をすることが容易である」という内容である。

「内容・今後・ペア」は、「教える内容について今後の検討が必要である」とう自己評価であった。「文法・発表・細かい」の連鎖では、「文法を使えるように教



【図3】教材制作の関連語の共起ネットワーク

えることの難しさ」等に触れていた。「表情・簡潔」では、「学習者の表情が見えない難しさ」を感じたという内容であった。

「可能・思える」は、「可能形の導入に工夫が必要」との内容であった。「聞く・言い方」は、「丁寧な言い方、別の言い方」「もう一度聞く・聞き返す」等を指していた。

以上から、教材制作の過程では、オンライン教材の特色、対面とは異なる配慮、分かりやすい提示の方法、楽しく学べる工夫、自主学習を念頭においた教材作成等、多角的な視点から教材の制作に取り組んだことが明らかになった。これらは、オンライン教育だけでなく、対面の一般的な日本語教育でも十分通用する日本語教師の大切なスキルである。

よって、教材制作の活動は学生に日本語の教育の教材について、初歩的ではあるが深く考える機会を提供したと考えられる。

4.3 教材参観からの学びの分析

ここでは、教材参観に関するテキストの分析から、学生が他のグループの作品と発表を見てどのようなことを学んだかを探る。教材参観の部分のテキストの概要は、KH Coder 3で解析した結果、段落数18、文数70、総抽出語数2,450、異なり語数488が抽出された。この中で、分析に使用される語の総語数は961語、異

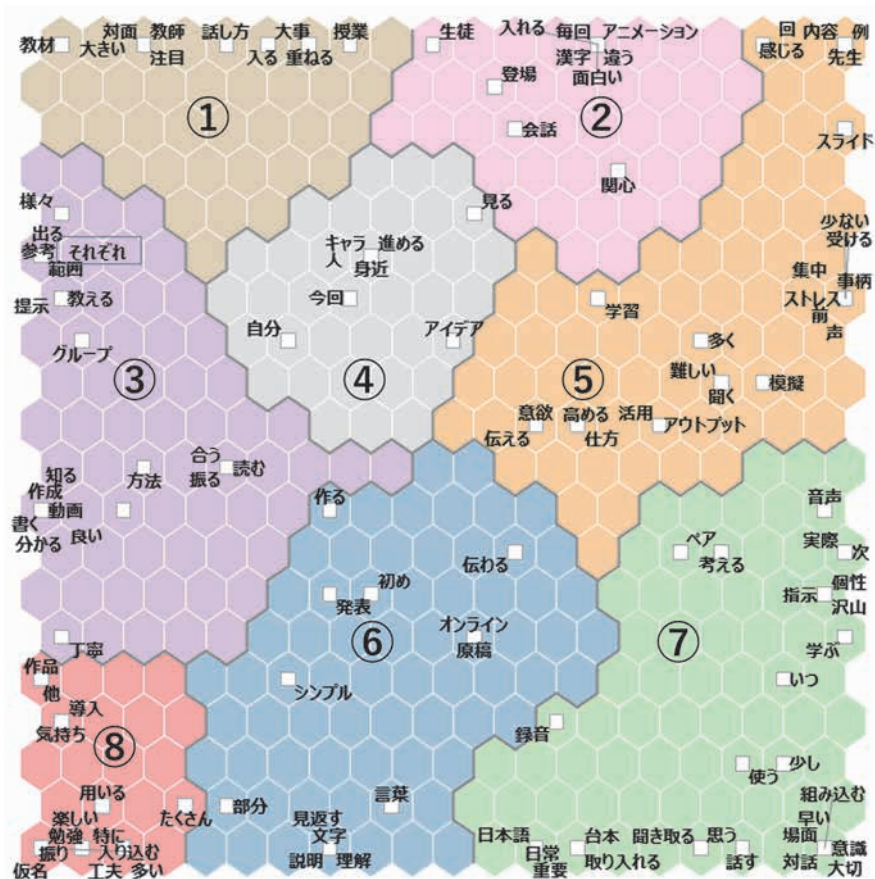
なり語数361であった。

テキストの概要を可視化するためにKH Coder 3を用いて頻出語の自己組織化マップ（【図4】）を作成した。自己組織化マップでは、テキストの中に現れた頻出語で、出現パターンの似たnodeが集まってクラスターを形成している。よって、近くに布置されている言葉の組み合わせを見ることで、どのような言葉同士が似通った文脈で使われているのかを読み取ることができる。それぞれの語はKWICコンコーダンスで基のテキストを確認しながら解釈できる。この自己組織化マップでは、分析者が特定の語を選ぶといった「手作業」をいっさいまじえずに語の布置が行われている（樋口、2020）のが特色である。

【図4】は出現回数2回以上、クラスター数8の分析結果である。ここでは、①～⑧のクラスターの内容を順に読み解いていく。解釈は、KWICコンコーダンスで頻出語のテキストを確認しながら行った。

クラスター①は、対面授業とオンライン授業の違いである。「板書とスライドの違い」「話し方の違い」「学習者が見えない場合に分かりやすくする工夫」「学習者対応の仕方」等について熟考したことが分かった。

クラスター②は、学習者の関心を高める方法についてである。「興味を引く会話」「アニメーションを取り入れた漢字指導」「ゲーム的な要素」「司会者的なキャラクターの投入」等で、「既製の教材ではあまり見ら



【図4】発表活動の抽出語・自己組織化マップ

れないユニークな発想」が参考になったとしている。

クラスター③は、自作教材による多様な導入方法からの学びである。「振り仮名をつけるか」「文法や活用の導入方法」「誤用例の提示」「文型等の使い方の説明」「注意すべき点」等、他の作品を見ることで、「自分の中の教材の概念が広がった」等の感想が見られた。

クラスター④は、独自のアイデアに満ちた教材からの学びである。「身近な登場人物を用いる」「学習用の自作キャラクターを投入する」「自分たちで撮った動画を挿入する」等、自分では思いつかないような独自の新しいアイデアが豊富で、少し工夫することで独自の教材になる面白さを実感したようである。

クラスター⑤は、模擬授業（実演）を見て気づいたことや発見したことである。まず、「スライドの見やすさ、文字の大きさ、情報量、教師の説明との整合性」等のスライドの作り方に関する学びである。次に、「的確な指示の出し方」「気持ちが伝わる話し方」「関心を高める導入の方法」「インプットとアウトプットの方法」「難易度の調整方法」等についての気づきである。

また、「ここは難しいのでゆっくり学習しましょう」「前のスライドに戻って考えてみましょう」等、スライドを使った授業の進め方も参考になったとしている。さらに、学習者の心を和ませるような声かけの大切さにも触れていた。他グループの発表を見て、自分

たちの作品や発表について振り返ったことも分かる。模擬授業の実演は、自分たちが受けていて楽しい授業が多かったとの感想も見られた。

クラスター⑥は、オンライン授業の長所・短所を踏まえた教材作成に関してである。オンライン教材では、「分からないところを何度でも見返せる」「事前に準備しておく」等が長所として挙げられていた。一方で、「その場で学習者に対応できない（オンデマンド教材の場合）」「一方的になりがちである」「やれることが限られている」等が短所として挙げられていた。その他、「ゆっくりと丁寧に話す」「学習者に伝わりやすい話し方にする」「文字で説明する部分と、文字にはせず言葉だけで説明する部分があってよい」「短時間で分かりやすい授業の工夫をする」「シンプルで見やすいスライドにする」等が留意点として挙げられていた。

クラスター⑦は、オンライン教材のコンテンツ作成についてである。「録音の際にはあらかじめ原稿をつくり、説明方法、言い回し、提示順序等を精査した（対面授業ではそこまではしていなかった）」「音声はスライドを見ながら聞きやすいように入れた」「ここで音声を止めて考えてください」等スライドの進め方の指示を含め、様々な留意点が挙げられていた。

さらに省察も含まれていた。「対話の場面を組み合わせることの大切さを実感」、「話す早さをあまり意識しな

かった」「早口になってしまい聞き取りにくくなった」等である。

クラスター⑧は、授業や教材に関する様々な工夫からの学びである。「楽しくする工夫」「導入の部分の工夫」「学びやすくする工夫」「学習に入り込みやすくなる工夫」「勉強しやすくする工夫」「振り仮名の付け方の工夫」等、他の作品の工夫から学ぶところは多いことが挙げられていた。

以上、教材参観を通じて、参考になったこと、気づいたことが多々あり、また、自分たちの教材について省察する機会となったことが分かった。「回を重ねる毎に各回のいいところを拾い上げて教材が作成されていたので勉強になった」「学習者に寄り添った授業内容とは何か」等の感想も見られ、学生が様々なことを学んだことが明らかになった。

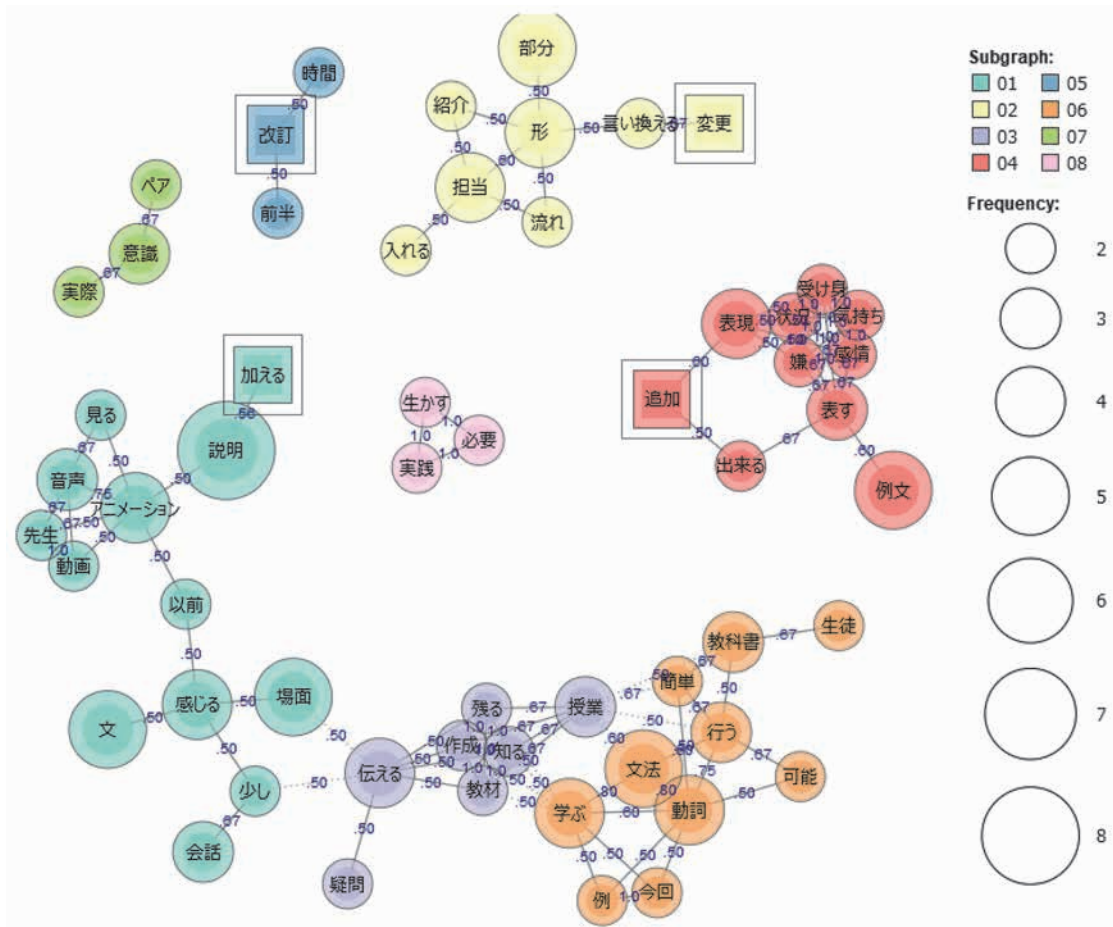
4.4 教材改訂からの学びの分析

教材改訂を通じて学生が学んだことを考察する。当該の部分のテキストの概要は、KH Coder 3で解析した結果、段落数18、文数62、総抽出語数2,131、異なり語数449であった。分析に使用される語の総語数は813語、異なり語数313あった。ここでは、「加える」「追加」「改訂」「変更」「付け加える」「改善」の6語をキー

ワードとしてKH Coder 3で関連語検索をし、関連語の共起ネットワーク図を検出して可視化した。それが【図5】で、nodeの数(N)は57、edgeの数(E)は98、密度(D)は0.061である(「N 57, E98, D.061」)。

全体を見ると大小8個の連鎖が見られる。これらの連鎖から改訂点を確認し、学びの内容を読み解いていく。KWICコンコーダンスでテキストを確認しながら、一つひとつ見ていくことにする。

まず、「追加」を含む10語の連鎖では、表現の導入において状況・気持ち・感情等が分かるように例文等追加したこと、「変更」を含む連鎖では、言い換え練習等を入れる等の変更をしたこと、「加える」を含む大きな連鎖は、教材に説明、アニメーション、音声、動画等を加えて分かりやすくしたこと等が主な内容であった。「改訂」を含む3語の連鎖は、時間や全体のバランスを考えた教材の改訂とあった。以上は、単に例文1文を提示して、文法や文型を説明、練習をするのではなく、場面や文脈とともに文を提示すること、対話の形式にして提示すること等の重要性に学生が気づいたからだと思われる。さらに、文や表現の使われる状況をよく分かるようにするために動画、アニメーション、音声等を追加したと思われる。特に受験用の英語教材等では、英文が文脈無しで提示され、用法が



【図5】教材改訂の関連語の共起ネットワーク

説明されていることが多く、その影響が日本語教育にも見られる。しかし、日本語教育ではこの方法はあまり通用しない。コミュニケーションを主体とした教え方が主であること、さらに、媒介語を使わないで教えることも多いからである。特に初級では説明が分かるような日本語力はないので、例文や状況を設定することで、意味や使い方を習得できるようにする工夫が必要である。

この他の連鎖では、改訂にあたって考えたことや改訂の理由が書かれていた。「実践・生かす・必要」の連鎖は、「実践に生かせるように教えるには何か必要か」、「文法・学ぶ・動詞」を含む10語の連鎖は、「説明を簡単に練習を増やした」、「伝える・作成・授業」を含む7語の連鎖には、「内容が分かりやすく伝わる教材作成や授業にするためにはどうしたらよいか」に関する内省が書かれていた。「意識・ペア・実際」の連鎖は、「実際の場面で使うことを意識する」ことの必要性に触れていた。よって、学生は日本語教育に大切なことを学んだと考えられる。

4.5 授業全体の感想

最後に、授業全体の感想の内容を見てみる。KH Coder 3を用いて当該のテキストのクラスター分析を行った。クラスター化の方法はWord法を用いた。クラスター数については、データの解釈を目的とした予備分析を行い、クラスター結合水準の値のデータや解釈のしやすさ等を総合的に判断して5に設定した。分析の結果、各クラスターの特徴語として、【表2】に示した特徴語が抽出された。抽出語は、Jaccard類似性測度の大きい方から10語までをリストした。クラ

【表2】各クラスターの特徴語

クラスター1	クラスター3	実感
対面	今回	新鮮
学べる	終わる	普通
感じる	スキル	面
良い	パソコン	模擬
授業	フル	クラスター5
オンライン	頑張る	作品
状況	期間	見る
多い	気	初めて
思う	求める	参考
改めて	協力	模擬
クラスター2	クラスター4	作る
楽しい	スムーズ	反応
経験	完成	学習
思う	計画	楽しい
—	言える	顔
—	時期	—

スター2は3語のみである。

以下では、クラスター毎にKWICコンコーダンスでテキストを確認しながら、内容をまとめる。クラスター1は、オンライン授業と対面授業の特色についてである。オンライン授業は、「対面授業に比べると不便なことの方が多かった」「直接生徒の反応が見られないのは教師にとって辛い」「学習者の反応がいかにか授業を成り立たせるうえで大切なのか知った」「対面して授業を行うことの大切さを改めて感じた」「対面で行う授業にしかできないこともあるが、オンライン授業でしかできないこともある。それが発見できたので良かった」等が見られ、この実践を通じて両指導法について様々な視点から考えたことが分かる。そして、「どちらでも良い授業を提供することができるような教員になっていきたいと感じた」という記述が見られ、この授業の目的の一つが達成されたと思った。

クラスター2の特徴語は、「楽しい」「経験」「思う」の3語だけである。「とても楽しかった。めったにできないことだったので、いい経験になった」とあり、日本語の授業の楽しさを感じてもらえたことは成果の一つだと考える。

クラスター3では、オンライン教材の作成には、パソコン等のスキル、及び、対面とは異なる授業スキルが求められるという感想である。

クラスター4は、教材制作による達成感や経験の享受である。「不安な面もあった」「模擬授業をスムーズとは言えないかもしれないが完成させることができた」「オンライン模擬授業を計画するというのがとても新鮮でいい経験になった」という感想が見られた。

クラスター5は、教材参観からの学びである。「他のグループの授業やその工夫を見ることが出来る貴重な機会」「他の作品を見て自分の教材を作る参考になった」「自分の作品について様々な観点からアドバイス等をもらうことができた」「こんなこともできるのだと発見ばかりで楽しかった」という感想である。

以上、全体の感想から、学生が改めて対面授業とオンライン授業の短所・長所を考えたこと、その上で日本語教材のあり方や作成に必要なスキルについて考えたことが明らかになった。そして、どちらもできる資質・能力を身につける必要性も感じたことも示唆された。

V. まとめと課題

5.1 まとめ

本研究では、日本語オンライン教材の制作等を通じて学生が学んだことを省察レポートから分析し、以下の結果を得た。「教材制作」においては、オンライン教材の特色、長所、短所等について自分たちで発見することができたと考えられる。

「教材参観」においては、他のグループの作品の独

創的なアイデアや工夫等を見ることで、教材作成に必要な様々なスキルを吸収できたと考えられる。作品の参観では、学習者の視点と教師の視点の両方から考察することができ、分かりやすい教材や提示の方法とは何かを考える機会となった。また、学習者が興味をもつ内容、楽しく学べる工夫等、授業に対する視野を広げることができたと考えられる。

「教材改訂」においては、文や表現を実際に使えるようにするにはどうするかに悩み、その結果、場面づくりや文脈を示すことが重要であることに気づくことができた。本授業で取り扱った文法や文型等は限られているが、今後の日本語指導の原動力になると考える。

この授業を通じて学生が学んだことは、日本語教育の初歩的なことばかりであるが、オンライン授業においても対面授業においても通じる大切なことである。

この実践では、初めてのオンライン教材制作で、学生たちはグループで知恵を出し合って協力し、様々な問題を解決しながら作品を完成させたと思われる。よって、アクティブ・ラーニングの理念に基づいた学習活動もできたと考えている。

5.2 今後の課題

本実践は、コロナ禍で突然始まった遠隔授業を活用した試みであったので、授業計画も十分とは言えず、教師にとっても学生にも戸惑いがあったと思う。パワーポイントの音声・動画の挿入方法、アニメーションの付け方等を初めて学んだという学生もいた。それでも、完成した作品はどれも素晴らしいものであった。教材としてはまだまだ伸び代はあるものの、学生の独創的なアイデアに満ちており、日本語学習者を魅了することは間違いない。今回の実践では、制作した教材を日本語学習者に対して実際に使ってみてフィードバックを得ることはできなかった。よって、これをこの授業の今後の課題としたい。これからは日本語教育にもオンライン教材やオンライン教育（授業）が導入される機会が増えると考えられる。よって、海外の日本語学習者等を対象としたオンライン教育実習やそのための教材作成等ができる資質・能力の養成を進めていきたいと考えており、本実践をその端緒としたい。

参考文献

- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子 (2011a). 『初級日本語げんきⅠ第2版』 ジャパンタイムズ.
- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子 (2011b). 『初級日本語げんきⅡ第2版』 ジャパンタイムズ.
- 樋口耕一 (2020). 『社会調査のための計量テキスト分析第2版』 ナカニシヤ出版.
- 稲葉みどり (2019). 「日本語教授法の理解と実践力の

育成 - 模擬授業の観察を通じて実習生が学んだこと -」 『教養と教育』 19, 1-8.

稲葉みどり (2020a). 「日本語模擬授業の自己評価 - この実習で学生が学べなかったこと -」 『教養と教育』 20, 7-14.

稲葉みどり (2020b). 「模擬授業の教育的効果の考察 - 様々な外国語教授法の実践を通じて -」 『教科開発学論集』 8, 7-15.

稲葉みどり (2020c). 「日本語教師養成のための授業研究 - 模擬授業の省察レポートの分析 -」 『愛知教育大学研究報告, 人文・社会科学編』 69, 19-27.

(2021年9月24日受理)